

# 峠の向こうは春

## 「心の復興は続いている」16歳の語り部が伝えたい3.11の記憶

2011年3月11日の東日本大震災を小学5年生の時に被災した子どもの話を収めた『16歳の語り部』（ポプラ社刊）という本があります。

2011年3月11日に発生した東日本大震災。被災地には、当たり前ですがたくさん子どもたちがいました。彼らは彼らなりの感覚で、「あの日」を記憶しています。

そして2016年。3人の話は『16歳の語り部』という1冊の本になります。

大人でさえまともに受け止めることの難しかった「あの日」のこと。こんな風に綴られています。

『息も切れぎれに図書室に戻ると、同じクラスの友だちと合流できました。ふと奥のほうに目をやると、体育館から移動してきた人たちが窓のところに集まって、口々に何かを言いながら外を見えています。津波が押し寄せる中、逃げ惑う人、車に乗ったまま動けなくなってしまった人に向かって「校舎に上がれ！」「逃げろ！」「早く！早く！」と、みんな大声で叫んでいました。』

彼女は津波で家を流され、大好きだった子犬と親友を失いました。一時は「私なんか生きる価値ない」とまで思いつめるも、友人の存在や「語ること」を通じて、前を向くことができたといいます。

『学校がはじまる少し前、3月の終わりのことでした。親友が亡くなったことを、父に聞かされました。私の心の中には ずっと引っかかっていることがあります。そして、それは今も引っかかったままなくなりません。震災の前日、3月10日の帰り道、実は、その子とケンカ別れをしていたんです。たぶん、本当にちょっとしたきっかけだったと思います。今となっては、どうしてケンカをしてしまったのか思い出せません。理由は思い出せないけど、ケンカをしてしまったことだけはずっと覚えています。「あのときのこと、私、謝れていない」かわいがっていたナイトは、今も行方不明のまま。家も流された。そして、大切な親友も亡くなった。津波が、私の大切にしていたものを全部、持っていったのです。

（その後）実際、友達に話すことで、気持ちの整理がついてラクになりました。でも、ラクになるのは少しの間だけ。しばらくすると、自分の中のどろどろした気持ちが、またぐるぐると回りはじめます。そのたびに、私は布団の中で毎晩泣きました。そして、それを自分の中で溜め込んでいると一気にあふれ出てしまいそうになるから、また少しずつ吐き出さないといけません。苦しくて、いっぱいいっぱいだったんだと思います。』

## 「語ること」が、前を向かせてくれた

『ただ、心は目に見えないので、『心の復興』がどこまで進んでるかはわかりません。暮らしの復興以上に、ずっと時間がかかると思います。』

『私たちは災間を生きていると思います。もしかすると明日、災害が「自分ごと」になってしまうかもしれないのです。だからまず、誰かの体験を聞き、想像してみる。自分だったらどうしようと考えることが大事なのだと思います。』

下に掲載しているのは、宮城県気仙沼市立階上（はしかみ）中学校の当時の卒業式の答辞です。この答辞は、先生が8年前に3年生を担当していたちょうど今頃、生徒に紹介しました。全員が真剣に聞いてくれたことを覚えています。この中学校では、卒業式が3月12日でしたが、前日の震災のため、22日に行われました。被災した中学生の思いが伝わる答辞です。

本日は未曾有の大震災の傷も癒えないさなか、私たちのために卒業式を挙げていただき、ありがとうございます。

ちょうど十日前の三月十二日。春を思わせる暖かな日でした。私たちは、そのキラキラ光る日差しの中を、希望に胸を膨らませ、通り慣れたこの学舎を、五十七名揃って巣立つはずでした。

前日の十一日。一足早く渡された思い出のたくさん詰まったアルバムを開き、十数時間後の卒業式に思いを馳せた友もいたことでしょう。「東日本大震災」と名付けられる天変地異が起こることも知らずに…。

階上中学校といえば「防災教育」といわれ、内外から高く評価され、十分な訓練もしていた私たちでした。しかし、自然の猛威の前には、人間の力はあまりにも無力で、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきました。天が与えた試練というには、むごすぎるものでした。つらくて、悔しくてたまりません。

時計の針は十四時四十六分を指したままです。でも時は確実に流れています。生かされた者として、顔を上げ、常に思いやりの心を持ち、強く、正しく、たくましく生きていかなければなりません。

命の重さを知るには大きすぎる代償でした。しかし、苦境にあっても、天を恨まず、運命に耐え、助け合って生きていくことが、これからの私たちの使命です。

私たちは今、それぞれの新しい人生の一步を踏み出します。どこにいても、何をしようとも、この地で、仲間と共有した時を忘れず、宝物として生きていきます。

後輩の皆さん、階上中学校で過ごす「あたりまえ」に思える日々や友達が、いかに貴重なものかを考え、いとおしんで過ごしてください。

先生方、親身のご指導、ありがとうございました。先生方が、いかに私たちを思ってくださっていたか、今になってよく分かります。

地域の皆さん、これまで様々なご支援をいただき、ありがとうございました。これからもよろしくお願いいたします。

お父さん、お母さん、家族の皆さん、これから私たちが歩いていく姿を見守っててください。必ず、よき社会人になります。

私は、この階上中学校の生徒でいられたことを誇りに思います。

最後に、本当に、本当に、ありがとうございました。

平成二十三年三月二十二日  
第六十四回卒業生代表 梶原 裕太